

# 昭和から平成 プロレス（夢先生案内人）

昭和30年生まれの赤と青、金曜日夜8時の  
テレビ朝日の番組は、プロレスを樂しむ最高  
の至福の時と言つて良かつた。特にメインの試合は、  
必ずアントニオ猪木VS外國人選手である。印象は、  
残していは選手、私のベストテンをえらんでけました。  
ビル・ロビンソン、ジョニー・ハーヴィー、タイガ！・ジエット・シン  
アンドレ・ザ・ジャイアント、スタン・ハンセン、  
クンツジャー・バンバン、ヒガロ、ブルーザー・プロディ、  
ハルク・ホーガン、ライルエンド・ルスカ、ヒラク・バン・ベイダー、  
以上

毎回ハラハラ、ドキドキの試合であつた。特に、観えて  
いるのは、昭和55年七月二十九日 VS ハンセンとのNWF  
王座の防衛戦、猪木がハンセンの必殺技ラエスタン、  
ラリアットを逆ラリアットで勝ったのは、すごい結果  
であり、石勝負だつたと思つた。(ラリアットと逆腕による打撃)  
さて、ここから私の夢のカタリとして、もしもこの時代に  
交流戦や対抗戦があつたら、仮説して夢の試合  
形式を書きたい。私がプロレスファンにならざるを得ない、  
初めて生観戦した試合が昭和49年、蔵前国技館  
でのアントニオ猪木VSストロンゲル、小林の日本人対決、  
伝説の試合である。新日本のエースである猪木に  
國際のエース小林がアリーナなぞ、挑戦した注目  
の試合で、猪木がスープレックスホールド(岩石落とし固め)  
三連発により勝利したすごい試合であつた。

この年から、東京スポーツ新聞が制定したプロレス大賞  
では、MVP・アントニオ猪木、年間最高試合賞と  
して、猪木が小林を關賞。小林が受賞していく。  
この試合が評価されたものであつた。当時は、新日本、  
全日本、國際の三団体しか無かつた、現在のように

交流戦がありまえになつた時代ではなかつた。

国際プロレスが、昭和56年(一九八一)には解散してしまひ、全員フリーになつた事で国体戦よりも個人がそれらの闘いとして、自分の存在をアピールするようになつた。はぐれ国際草団として、新日本に登場して最初は、インパクトがあつたが、シンブル戦として成立しなかつた印象と残念ながら、個人の戦闘能力が弱いせいでもあり。ラッシャー木村、アニマル渡口、寺西勇が三名でアンティオ猪木とのハンディ戦をやつて、やつと勝った試合では、木村と寺西がノックされ、アニマル渡口がなんとかねはって勝つたと言つて良い。これで金日本に参加した阿修羅・原とアティイ井上がいたからまだ遅うだ戻りになつていたがろう。その後ラッシャー木村と寺西勇は、金日本に移籍し、アニマル渡口は、長州力と共にジャパンプロレスとして、金日本に、レカシながら、一年立ちとて新日本に出席りしてしまふ。交流戦や国体戦がありまえになつたのは、昭和59年長州力がジャパンプロレス旗揚げ、新日本からJWD(ユーハーサルプロレス)として前田・高田・山崎・藤原・タカ・スク、船木、鈴木、木戸の八名による新日本内での対抗戦が盛りあがるからだと思ふ)。

また、全日本でも天龍源一郎がフリーとなり、SWSとして国体を旗揚げして、新日本の選手も移籍。その後、大仁田がFMWを旗揚げ、三沢が、NOAHを旗揚げ、橋本が、ZERO MAXを旗揚げ、秋山がノアリカラ全日本に、新日本の武藤が全日新藉。その後、WRESTLE-1を旗揚げ、猪木がエグドを旗揚げ、etcこのように新日本と全日本から移りかわるのようにしていくさんの固体が出であがた事により、平成になつてから、2012東京ドームで金井・NOAH・新日本三团体による交流戦があつたエース対決ではなかつた。

私の想い描く、もじこんなスープなドリームマッチか、  
出きたら最高だと思う事をこの場所を利用  
して書こうと思つ。

### ドリーム・マッチ 試合形式

新日本での紅、全日本でのチャンピオン・カーニバルと同じ  
ように、参加選手全員による総当たり戦(シングル)  
が組まれる。

総あたり戦(シングル)によるリーグ戦

45分一本勝負、勝ち点(2ポイント)引き分け(1ポイント)

負(0)

(一月～十月末) 全国巡回場

レフリーケ内1名 場外1名 計2名

最終トーナメント戦(シングル)戦

上位4名 リーグ2名

50分一本勝負引き分け延長30分

一位VS三位 二位VS四位 三位まで決着

負傷による欠場の場合(五位と六位の選手出場)

レフリー場内1名 場外1名 計2名

開催場代々木国立競技場

アストアーチ斯特

サンオール・スターズ

矢沢永吉

長渕剛

ユーミン

日時

十二月三十一日

RM 五時～十二時

年間最高試合賞(ワーランド)

殊勲章(ワード)選手 5千萬円

最優秀賞 一名 5千萬円

最優秀賞 二名 3千萬円

タトツル

スープ・ミヤパン・カツア

制覇

当時の一審みた、プラチナカルトは、何と

言つても、シャイアント馬場VSアントニオ猪木

ジヤンボ鶴田

藤波辰巳

大木金太郎

藤波辰巳

坂口征二

天龍源一郎

新日本プロレス

杉山

藤原喜明

藤波辰巳

長州力

木村健悟

平田淳二

小鉢星野甚太郎

佐木修

後藤達也

山田恵一

飯島詩郎

駒橋真也

武藤正洋

佐々木健介

司澤高志

天山広吉

谷津喜加

中西学

高田祐志

前田日明

大谷晋二郎

船越勝

鈴木伸彦

木戸のぶ

西村修

全日本プロレス

ガイアント馬場

大木金太郎

ケレント・カブキ

上田馬之助

ケンドル・カガ

アントン・カガ

<37%>

天龍源一郎、三ヤンボ、鶴田、ロング・羽田  
タカハシ・アロ、タニハシ弘道、清正信、  
川田利明、(アリム)田上明、三沢光晴。  
鶴山準、大森隆男、(タケル)本田多聞、  
高山善廣

<22名>

## 国際プロレス

豊登、サンカラ杉山、ラフシャー木村、  
ケリー・ト草津、マイティ井上、寺西勇、  
アシマル添口、ストロング小林、剛竜馬  
スマッシュ隼人、阿修羅原

<11名>

のすごいメンバー12名、この試合もかなりので  
かでじゃないアシマルな試合もあり、対抗戦となると  
おじいが互いのアライドをかけて、闘いのマンタ  
ラントになる事は、まちがいで無いであろう。  
特に、新日本VS全日本の、お互いの団体意識が  
ハシハシしないのでどちら試合が勝負となるのか?  
至日の回天王VS新日の闘魂三銃士の試合は、  
誰でもか注目して観てみたいトトと思う、  
ここで言われてくる至日の回天王とは、全員が三冠  
へ上級を獲得した選手で、三沢光晴、  
小橋健太(健太、田上明)、川田利明の四名、  
新日本の大魔神三銃士とは、全員が、IWGP入  
蝶野正洋の三名で、それも力と気と実力  
あわせも、たゞ1スター達である。残念ながら  
現在、鷲本真也と三沢光晴の二名は他界  
してしまった。おそらくこれらのシンケル戦がよ  
タツク戦となつたならば、東京ドームはアーバンにな  
いたろう。

まず三沢VS武藤の天才対決は、どちらも二つの顔をもつてゐる所が最も嬉しい。三沢は二代目タイガーマスクとして、武藤は、悪の化身、ケレート・ヒタに変身してリングの中・外を四次元空間にすまんとする。改めて小橋健太VS橋本真也の対決は、体力の限界に挑戦する肉体対決である。どちらもチヨップで得意としているので、意地のチヨップ合戦には、プロレスを知らない人でもな、とくする試合にならう。川田利明VS蝶野正洋の対決は、どちらもキックで得意としているので、キック対決であり、川田のキックは、連続してうつもので、蝶野のキックは最後をきめな技としてケンカ・キックと言つて有名である。また川田のハツブボーンでは、アマチュアレスリングと蝶野のハツブボーンは、鉄人ルーティズの弟子として、レスリングテクニックの実力は、おり紙つきである。どう言つれ意味で、レスリングのおもじこが伝わる試合になると思ふ。田上明は、長身で最もミニアント馬場が好む選手である。馬場の得意な技を使つて馬場二世とも思ふ。選手で性格力おどりをしているので、レスラーとしては、損益存在である。その意味では、新日の中でも長身で又猪木二世とも思える前田日明との試合はおもしろい勝負になるのではないかと思う。(あきら対決)興味のつきない試合は、まだまたくさはあるのか、20名の選手が終あたりだとすると年間六百三十試合の組合せが考えられる。これこそまさにトリーハマッチと言つて良いだろう。最終戦は残る選手は、果してA・猪木かGT・馬場か坂口征二かストロング小林か、ジャンボ鶴田か長州力か天龍源一郎か、三沢光晴か橋本真也か…それとも前田日明か…誰なんだ?